

5年1組

木に働きかける中で生まれてくる思いから
より良いわたし達の暮らしをつくっていく子ども達
～「木のミュージアム」から学んだこと～



つながれ 広がれ 木の輪 「木のミュージアム」を終えて



今年度の活動のまとめである5年1組木のミュージアム。この1年間活動してきた学びを発信することを目標に開催しました。保護者の方やお世話になった長野森林組合の方を招いた初日から、4日間にわたって、全校を招待することができました。

そんな木のミュージアム1日目を終えた時、Aさんは、「みんなが楽しいって言ってくれたから、もっとこうしたいとか浮かんできた」と語り、Bさんは、「来てくれた人がもっとこうしたらって言ってくれて、まだまだできると思った」と語っていました。実際に来場された方がいたからこそ、反応があり「もっとこうしたい」という願いや思いが生まれてきている姿だと感じました。

2日目からはその言葉通り、子ども達の動きが変わっていきました。寄木体験コーナーを担当していたCさんは、「もっと大人数でも体験できるようにしたい」と語り、机の配置を口の字型に変え、自ら真ん中に立ち、寄木造りを丁寧に教えていました。

初日なかなか参加者が集まらなかったカプラのコーナーのDさんは、「体験しづらい雰囲気があるから、私達もカプラで遊んでた方がいい」と自らも動き始め、1日目を終え「みんなで町をつくろう」という看板をつくり、より体験しやすいブースへと場を作り変えていました。

木のスライド紹介をしていたEさんは、自分達のコーナーがどんなものか分かるように、2日目からは手作りの名札を作り、自分の胸に貼って会場を歩き回りながら呼びかけをしていました。そんな中、Eさんは、低学年に高学年と同じような説明をしても伝わりづらいと感じ、「ただスライドに書いてあることを言うんじゃない

くて、わかりやすくすることが大切だと思った。あるものを伝えるだけじゃ伝わらない。なにかに例えたり、少し言葉を変えたり、分かりやすくしようとするのが『伝える』ってことじゃないかと思う。『読む』じゃなくて『伝える』んだと思う」と考え、木の高さを身長で例えて説明したり、相手に合わせた表現を使ったりするようになりました。

スタンプラリーを担当していたFさんは、次のように日記に綴っていました。

木のミュージアム最終日

ついに木のミュージアム最終日がやってきました。私は（短い期間だけど）今まで、とても小さい声で、しかも「スタンプラリーやってみませんか」とボソボソとした声で喋っていたけど、やっていくうちに慣れたのか、前まで苦手だったのに、なぜか自然と大きな声で宣伝活動が出来るようになっていたのです。それに、分からない人へのサポートも沢山出来て、自分で言うのもあれだけど、最初と今回で全然出来なかった（不得意だった）ことが出来るようになって、人のサポートも出来たと思うし、自分にとっての成長にもなったなと思いました。



木のミュージアムをつくりあげながら、自分自身も成長しているFさんを感じます。さらに、そんな自分の成長を自覚化しているFさん。周りとの協働したこと、相手意識をもって自分にできることを精一杯努めていたFさんだからこそ、この短い期間で成長を感じられたのだと感じます。

担任は、木を追究していくことで、「より良いわたし達の暮らし」について考える子ども達を思い描いていましたが、そんな担任の想像を超え、考えるだけでなく主体的によりよいものをつくろうと動き出した子ども達の姿に大きな成長を感じました。そして、こうした子ども達の成長や追究を支えていたのは、ここまで木には働きかけ、そこから学んだ礎があったからであると感じています。

木を磨いたり、木彫りをしたりした時に感じた木の魅力からスタートした活動が、ここまで大きくつながってきたのは、キノハナの坂本さんや長野森林組合の方々との出会いも大きく影響しました。出会った人たちが共通しておっしゃっていたことは、「木について考える機会をもってほしい」という言葉でした。この言葉を発端に、学びを発信したいという願いが生まれてきた子ども達。同時に、改めて身の回りの木にも目を向け、樹木プレートづくりの活動へもつながっていきました。

木と携わる人々との出会いから生まれた思いを原動力にして追究し続けてきた5年1組の子ども達。様々な人の木や森林に対する思いも背負って開催したミュージアムとなりました。こうした力は児童会運営や6年生に感謝する会でも発揮されていたように感じます。ミュージアムの運営を経て、子どもたちもまた一つ成長したと感じています。

